

江戸の愛犬熱と柳川派

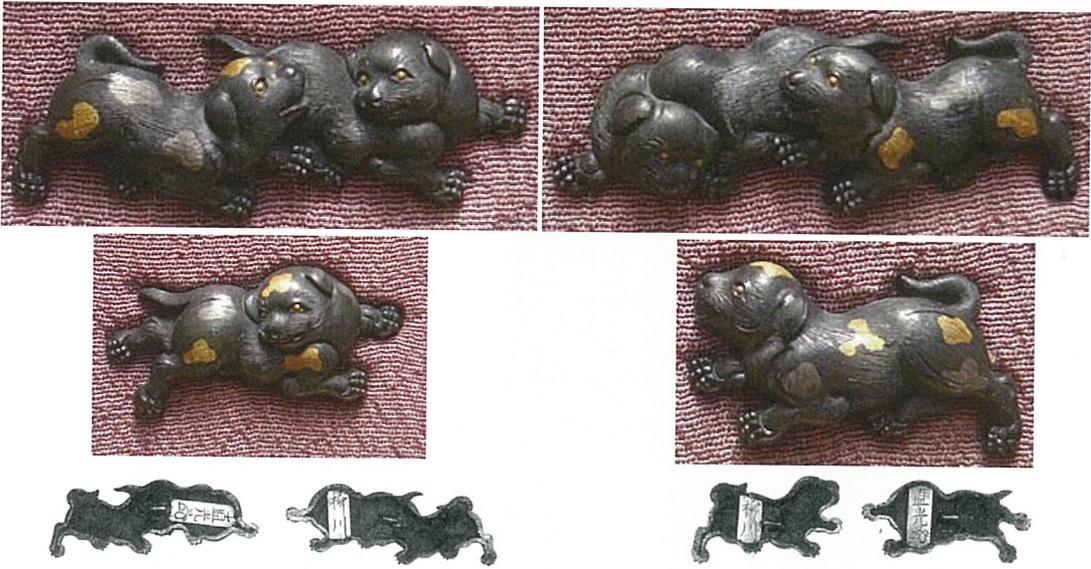
「狗見図」大小目貫くじ

伊藤 三平

1. 柳川直光の大小目貫

この犬（狗見）の大小目貫は、(株) 刀剣柴田の故青山氏によると、仕入れた虎徹の正真作に古びてボロボロになった大小拵が付いており、その綻びた柄巻きを外して取り出したものとのことである。

大の目貫の短冊銘は表が「柳川」、裏が「直光（花押）」となり、小の目貫は逆である。直光だけのことかもしれないが、当時の慣行だった可能性もある。うぶの大小目貫だからわかることである。なお柳川派の銘だが、目貫にはキバタ銘は少なく短冊銘が多く、そして短冊は表目貫だけに嵌入して、これに四字銘と花押を入れて裏目貫には嵌入しないものがあるとの見所も記しておきたい（『刀装小道具講座 3 江戸金工（上）』若山泡沫著の「直政」の項より）。



2. 柳川直光の経歴と作風

柳川直光の経歴は『金工事典』（若山泡沫著）によると次の通りである。享保18（1733）年に磐城国で白銀工の子として生まれ、寛延3（1750）年に柳川直政の門に入る。直政の嫡子二代直故が夭折したために養嗣子になるが、師の直政も宝暦7（1757）年に逝去したので柳川家三代（柳川家の代別は諸説あり）となる。師の孫の直春を育て、寛政年間（1789～1800）に四代を譲り、自分の娘婿の直時を分家としている。弟子に菊岡光行もいる。出身地の大名の相馬家と会津の保科家に入りを許されており、遠州流の茶道も嗜み、文化5（1808）年に逝去する。

『日本装剣金工史』（桑原羊次郎著）からの引用だが、喜多村節信が『筠庭雑録』に門人菊岡氏が書いた小伝からとして「その質、剛直、すこぶる識見あり」「直政が死去後、八歳の直春に力を尽くして教え、成人後に柳川家の家財をことごとく与えて、自らは別家に移る」「よく教えて倦まず。門人に良工多し」と記している。

芸術作品に生き様は関係無く、放蕩無頼でもいいものを残す人はいるが、直光は尊敬される人生を送った金工である。

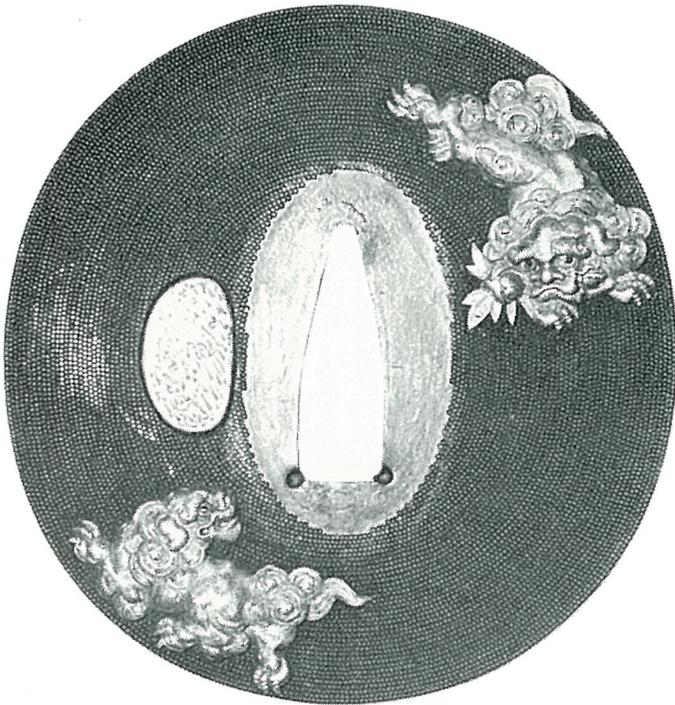
作風については、『日本装剣金工史』に加納夏雄の彫金談の該当箇所を所載しているが、現代仮名遣いに直して紹介すると「その鑿行は直政に似て、技量また師に次ぐべきものなり」の評であり、その直政については「技量勝れ、宗珉の高足弟子ともいおうべく、また当時すでに名匠の一人として数えられき。然るに直政は人物を彫ることを好まず、獅子野馬の類を好んで彫刻せり。殊に獅子はその最も得意とするところにして、柳川獅子と称せられたる一流を出しぬ。その鑿行、鮮麗にして鑿痕の力、瞭々として魚子に至るまでまことに精妙なり」と評している。

3. 柳川獅子とは

横谷宗珉の創出した横谷獅子の伝統を受け継いだ柳川獅子は次のようなものである。
 なお参考に後藤家の獅子も掲示しておく。



〈立図小柄：向獅子〉直政（『刀装具優品図譜 第17集』尚友会）



〈鐔：獅子牡丹〉直光（『金工鐔』小窪健一・益本千一郎著）



〈小柄：一匹獅子〉直光（『刀装小道具講座3江戸金工編<上>』若山泡沫著）

4. 愛犬の歴史と、この目貫誕生の背景

（1）犬を狗児とする理由

『広辞苑』の「犬」の項には常識的な犬の説明の他に「②ひそかに人の隠し事を嗅ぎつけて告げる者。まわしもの。間者、④ある語に冠して、似て非なるもの、劣るものの意を表す語。また卑しめ軽んじて、くだらぬもの、むだなもの意を表す語」と散々な語釈も記している。

また「犬侍：武士道をわきまえないような侍をののしっている語」、「犬死：無益に死ぬこと。むだじに」、「負け犬：競争に負けてすごと引き下がる人にたとえる」などの言葉もあり、武士にとっては良い意味はなく、狗児くわいと表示するのが慣例である。なお犬に悪い意味を付ける表現は英語やイスラム圏にもあると聞いたから、世界共通のイメージがあるようである。もともと犬に限らず、「猫をかぶる」「猿まね」「猪武者」の言葉もあるから、動物に対する人間の思い上がりから生まれた言葉とも考えられる。

（2）愛犬の長い歴史

ただし、犬は十二支の一つでもあり、古来から人類の大事な友であった。また犬は多産で、お産が軽いとして戌の日に神社に安産祈願をして犬張りの御守りをいただく風習は今も残っている。



〈目貫：二匹獅子〉無銘 栄乗 筆者蔵

横谷獅子、柳川獅子は、後藤家の獅子よりも、姿態の自由さを増している。その分、少し誇張が目立つと感じる。また眼の玉に色金を入れたりして、表情に富む。手脚の爪は鋭く感じ、額の毛（捲毛）も変化に富んで、より豪華、華麗である。

古代には犬養部^{いぬかいべ}という役職民がいて、犬とともに狩猟(獵犬)、守衛(番犬)の任務に就いていたと伝わる。このように役に立つだけでなく、かわいらしく、飼い主に忠実であり、愛玩の歴史は長い。

戦国時代から江戸時代前期は南蛮貿易による唐犬(「とうけん」とも「からいぬ」とも読む)が、当時の気風に合致してはやされる。犬山藩初代成瀬正成は唐犬頭巾を被っていたと伝わる。徳川家光の弟忠長の唐犬に薩摩島津家の家中の者がけしかけられ、それを斬り殺す事件をおこし、土井利勝が仲裁に入った事件も起きている。当時の無頼の町奴の唐犬権兵衛は、旗本の手飼いの唐犬2匹をけしかけられたが、土足で犬を踏み殺したので「唐犬」の異名が付いたと言う。またこの頃、唐犬結びという女性の帯の結び方も流行し、菱川師宣の「見返り美人」がそうで、両端が下がるのが唐犬の耳と似ているとのことである。また俵屋宗達に唐犬の子犬のような絵があるのを確認している。

江戸時代中期には貞享2(1685)年から20年以上にわたって「生類憐れみの令」が出されている。徳川綱吉は戌年生まれであり、中野に広い犬小屋を作って野良犬を保護している。日本にも食犬文化があったとも言われているが、中国や朝鮮半島の儒教文化と違って仏教文化の殺生禁止の思想が広まっていたことに加えて、この法令である。

(3) 江戸時代後期の狎ブーム

この直光の目貫が製作された江戸時代後期に大流行したのが狎^{ちん}である。当時、狎は犬でもなく猫でもない動物(だから「獣偏」に「中」を組み合わせた国字が作られる)と思われる。ただし狎にも色々あり、小型犬は全て狎と言われているにきらいもある。可愛らしいので、大奥や遊郭などの女の園では大人気であった。シーボルトコレクションに日本の狎の剥製もある。

19世紀前半には、犬の飼育書『犬狗養蓄傳』(暁鐘成著)が出版され、曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』(全98巻、106冊)が刊行され、大ベストセラーになっている。

明治維新後には外国人にも好まれ、欧州でジャポニズム流行の時代には、印象派の画家のマネ、ルノアールも注文を受けて、狎を描いている。日本の幕末にも、狩野芳崖が毛利家の御姫様の肖像に狎を描き入れた絵を残している。

(4) 京都画壇の円山応挙の狗見図

可愛らしい犬の絵は、円山応挙(享保18(1733)年〜寛政7(1795)年)によって多く描かれている。応挙が活躍した時代に狎(小犬)を愛した顧客が多かった証左と考えられるが、応挙自身も犬好きだったと思われるほどだ。日本のポップカルチャー(大衆文化)として「カワイイ」は世界を席巻しているが、その嚆矢は応挙の子犬図にあると思えるほどである。その弟子の長澤蘆雪(宝暦4(1754)年〜寛政11(1799)年)にも子犬の絵が多い。なお誕生は応挙より早い、活躍時期はほぼ同じ伊藤若冲(正徳6(1716)〜寛政12(1800)年)にも「百犬図」として1枚が確認されているが、応挙ほどの可愛らしさは出ていない。

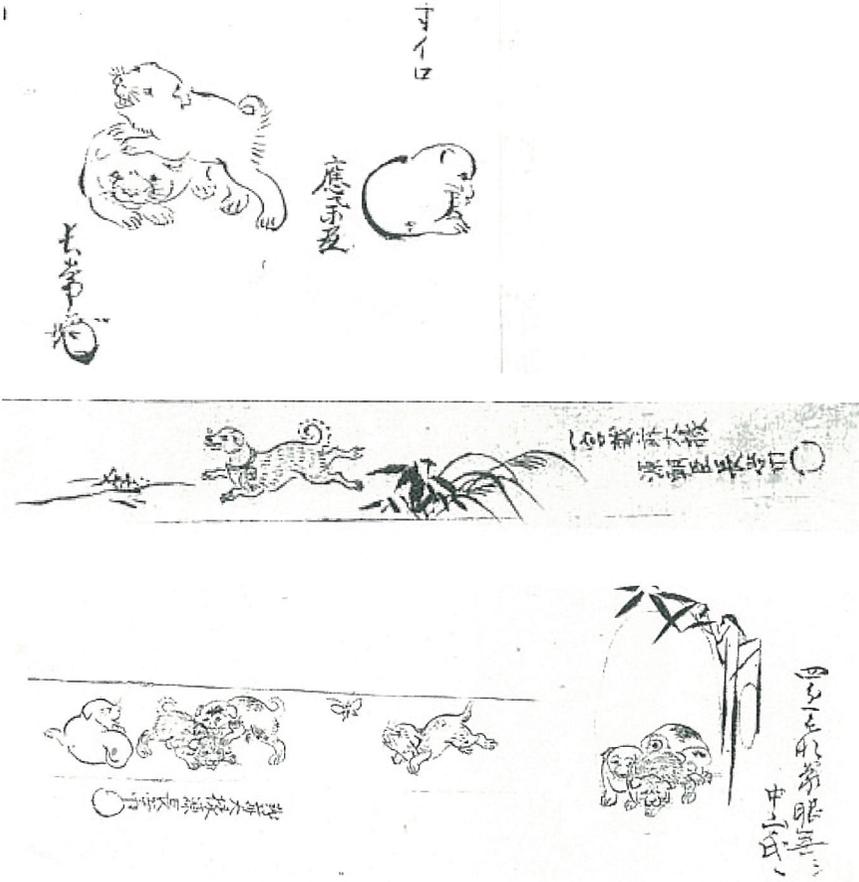


(応挙 安永戊戌年(安永7(1778)年)の作品、敦賀市立博物館蔵)

(5) 京都金工の一宮長常の狗児図

金工界で円山応挙のような写生で名を挙げたのは京都の一宮長常(享保6(1721)年~天明6(1787)年)である。

長常には「長常彫物畫帳」という下絵帳が残されている。ここには犬の絵が12ほど収録されている。『夏雄大鑑 補講一宮長常彫物畫帳』(三宅輝義編)より、その内のいくつかを紹介する。中には応挙の絵を参考にしたとの書き込みがある絵もあるが、応挙ほどの可愛らしさは出ていない。



5. 時代の潮流に戸惑ったか? 柳川直光

後藤家伝統の獅子の彫物に対して新風を巻き起こした横谷宗珉の横谷獅子。それを継承した柳川獅子を家の芸にした柳川派だが、狛愛玩のブームの注文に応じて作成した柳川直光の狗児図大小目貫は、姿態は後藤家以来続く伝統的な獅子の姿を借り、手脚の爪は柳川獅子の影響らしく、くつきりと彫っている。この為に、犬なのに獅子の強さを感じる。顔と尻尾だけを可愛らしさを出すように彫っているが、やはり逞しさが顔を出し、クマのような感じも醸し出している。体毛は実に細かい毛彫りを施して柔らかい感じを出し、そこに金と銀で象嵌して愛らしい斑犬にする工夫をしているが、応挙風の一宮長常の作風に対して時代遅れになったことは否めない。直光に狗児の大小目貫の注文を出した愛犬家の武士、あるいは戌年の武士は、武士であるから、可愛いだけではない力強い犬に満足したのかもしれないが、どうであろうか。

この後、柳川派は柳川直春、柳川直時と続く。家の芸である柳川獅子をはじめ伝統に恥じない作品を残していくが、直春の門人の河野春明が新しい作風で新境地を切り開いていくことになる。

なお狗児図の刀装具は少ないが、後藤家にもあることが『刀装金工後藤家十七代』(島田貞良・福土繁雄・関戸健吾共著)の「後藤家作品の図柄」の章でわかる。また写真図版として、村上如竹の縁頭(『刀剣金工名作集 江戸金工』)、佐野直好の三所物(『刀剣美術』)口絵・重要刀装具)、萩谷勝平の縁頭(『刀和』)所載を確認している。如竹は洋犬風であり、直好は様々な色金を使った五匹の犬がじゃれあっており、勝平は姿態、仕草が子犬ばい作品である。それぞれの金工なりに工夫しており、日本の刀装金工界の層の厚さ、素晴らしさを改めて感じる。